



歴史的多言語国家フランス

現代のフランスでは、新たに移民してきた者などを除いて、フランス語を満足に話すことのできない国民はほとんど存在しません。どんな辺境の村に行こうが、フランス語が通じるだろうかと心配する必要は、まずありません。

この点で、フランスは事実上の単一言語国家だと見なすことはできます。けれども歴史的に見ると、フランスという国は、その歴史を通じていくつもの言語が使われ続けてきた国なのです。ローマの支配下にあった時には、ほぼ全域でラテン語が使われていました。その後、フランスの南半分では、恐らく7世紀頃には、「オック語(またはプロバンス語)」と呼ばれる言語が、北部のフランス語とともに成立し、現在に至るまで使われ続けています。この言語は、フランス語に継ぐ有力な言語で、中世にはこの言語による華やかな文学作品が盛んに書かれました。現在日常的にオック語を使う人はあまりいませんが、オック語復興運動は継続的に行われています。

さらには、最南端のスペインとの国境地帯では、「カタルーニャ語」が、東部のアルザス・ロレーヌ地方では「アルザス語」が、西部のブルターニュ地方では「ブルトン語」が、北部のベルギーとの国境地帯ではゲルマン系の「フラマン語」が、そしてナポレオンの出身地コルシカ島では、イタリア語に近い「コルシカ語」が、大西洋岸のスペインとの国境にあるバスク地方では「バスク語」が、そしてスイスとの国境地域では「フランコ・プロバンス

語」が使用されています。

これらの言語は、フランスでは「地域語」と呼ばれているのですが、かつてのフランス政府は、これら地域語の公的な場面での使用を正式には認めていませんでした。しかし、1970年代以降は、地方分権の波にも押されて、地域語使用者の権利が認められるようになりました。初等教育で地域語の授業が行われたり、一部の言語については、大学入学資格試験(バカロレア)での科目として認定されるほどにもなったのです。

ただし、公用語はあくまでもフランス語ですから、フランス語を使った方が社会的に有利であることは間違いありません。情報や知識を伝える媒介となる言語も、ほとんどがフランス語です。地域語による放送も行われてはいますが、限定された範囲でしかありません。このため、オック語やアルザス語については復興運動が行われているものの、地域語の使用者が減少し続けているのが実情です。日本の方言と同じように、完全に消滅するということはないものの、地域におけるその勢力が減退するだろうことは予測できます。

そしてまた、世界語としての英語からの外来語は、その公的な媒体での使用に対する政府の施策にも関わらず、どんどんと増大し続けています。この流れを押しとどめることは困難です。かつての外交用語としてのフランス語そのものの威信も、危機にさらされています。

表紙写真
について

ノルウェーのベルゲンにて

青柳有季 Aoyagi Yuki (東京学芸大学附属小金井中学校)



かつてノルウェーの首都であり、北欧最大の港町だったベルゲン。現在人口は約25万人でフィヨルド観光の拠点として賑わっています。ハンザ商人による繁栄の時代を今に残すベルゲンのブリッゲン埠頭に來ると、タイムスリップしたような感覚に襲われます。

波止場沿いにはカラフルな木造建築が一行に並んでいます。これは中世ノルウェーを代表する細長い「ゴード」と呼ばれる建築で、切り妻屋根が特徴となっています。これはハンザ同盟時代に繁栄を極めたドイツ

商人によって建てられ、1702年の火災を経て修復、そしてブリッゲン地区は、1979年にユネスコの世界遺産に認定されました。今日ではカフェ、レストラン、民芸品店、クラフトショップ、工房として使用され、観光客に楽しまれています。そして、石畳の細い通り道、店のミシミシとなる黒い床、そして一部傾いている建物にも歴史を感じました。

ベルゲン港の広場には活気溢れる魚市場があります。そこには新鮮な魚介類から花や野菜などまで幅広く店が建ち並び、試食が気軽にできま

す。品切れの商品が続出していたある店の店員さんは、違う店から同じ商品を調達してもらっていました。ここにノルウェー人の明るく気さくな気質を垣間見た気がしました。

私がさっそく購入したのは、歯磨き粉のような真っ青なチューブに入っている「たらこペースト」です。そのチューブには、鰻を持って得意気に微笑む漁師の姿と三角屋根の「ゴード」が4軒描かれていて微笑ましく思えました。